民話（みんわ）

首ひねり

菊池市稗方　宮本　馨

出田の出はずれに地獄というところがある。清らかな水が湧き、村人が野菜を洗い、せんたくなどをする語りあいの場所でもある。

昔のこと、二月のある寒い日に一人の旅人がやってきて、南福寺の前の農家に泊めてもらった。遠くからやってきた珍しいお客さんというので、ごちそうをすることになった。夕方になったので、夫婦が「今晩のあれは手打にしゅうか、半どろしにしゅうか」。と相談しているのを、旅人が聞いてしまった。

これは大変なことになった。今さら逃げるにも逃げられず、どちそうに出されたボタモチも味もわからず、喉もとおらぬという有様。夫婦がおかしいと思い、「どうかしなはったですか」。とふしぎにたずねると、「いやいやどうもしません、ごちそうさまでした」。と何げないさまをよそおい、礼をいって風呂には入り床についたが、裏山の竹の葉ずれの音が一晩中きこえて、夫婦の台所のひそひそ話が気にかかってまんじりともしなかった。

長い一夜がようやく明けはじめた。すると庭先からどそどそと話声が聞えてくるので聞き耳を立ててみると男の低いさびた声で「お前は地獄に行って待っとれ、俺はちよっと首をひねってくるけん」、という話を聞いてしまった。旅人は一瞬冷や水を背中に浴びせられたようにびっくりぎょうてん、自分の首をひねられて、地獄の釜に投げこまれるのではないかと驚き、まっ青になり、着物を着ると逃げだしたという。足が宙をまうようにして赤星村を通りぬけ、菊戸橋をわたり、隈府が近くなったとき旅人はそっと自分の首をなでまわし、「やれやれ俺も首をひねられずにどうやら助かった」。とつぶやいた。ところが出田では、手打とは手打うどんのことで、半どろしとはボタモチのことをいうのであり、蓑の上四段をあむことを首ひねりというのである。とんだ間違いもあったものである。

（菊池民話集）

「家庭の日」作文入選作決まる

熊本県と青少年育成県民会議では、「家庭の日」が地域に浸透するよう小・中学生を対象に作文を募集したところ、三百四十一点の応募がありました。審査の結果、次のように入選が決まりましたので、作品の一部を紹介します。

◎特選

吉岡まさひろ（植木町立桜井小学校二年）
和田　まさみ（東陽村立種山小学校二年）
水足　ゆかり（甲佐町立甲佐小学校六年）
松崎　さとみ（泉村立泉中学校二年）
酒井　健二（鹿央町立米野岳中学校三年）

◎優秀

すぎむらかずみ（天明町立川口小学校一年）外九点

◎入選

きむらともみ（天明町立川口小学校一年）外二十九点

「家庭の日」について

鹿本郡鹿央町
米野岳中学校三年　酒井　健二

「青少年健全育成県民総ぐるみ運動」と、簡単に言われても、それがどんなことなのかすぐにわかる人は少ないだろう。でも「家庭の日」がどんな日なのか、それは聞いただけでわかる人が多いように思う。

最近、青少年の非行は、年々増加の一途をたどっている。それはテレビや新聞などでよく言われることである。

そこで「家庭の日」を設けて、青少年の健全育成を目ざした運動がおこなわれているのである。

僕自身の思っている「家庭の日」とは、一家全員がそろう夕食後などに、色々な話しで一時を過ごして、それによって家族のつながりを深めていき、幸福な家庭を築いていくための日だ、と思っている。しかし、そう思ってはいてもやはりまだ初めのうちは自分のなやみや、思っていることなど、とても口に出して言えないことが多いのではないだろうか、でもそんな時は初めからむずかしい話しでなくてもいいので、まず簡単でおもしろく、気軽に話して、少しでも多くの話し合いを持ち、それを習慣づけることが大切なことのように思われる。そして、このような話し合いを何回となくやっていくうち、心を開いて何もかも打ち明けて話し合うことのできる家庭、それこそ、血のつながり以上の堅い親子、兄弟の関係ができ上がるのではないか、という気がする。

最近では、テレビの普及などで家庭のだんらんや一家のそろった貴重な時間もほとんどが、ただ黙ってテレビを見てそれで結局終ってしまう、こう言うような家庭が少なくないように思れる。そして、それが青少年の非行に結びついたり、又は、家庭内の色々な紛争の原因になるようなことが意外に多かったのではないだろうか。その証拠として、新聞によく出るような記事で、中学や高校生の自殺の原因の中には、両親や先生に自分のなやみを言い出せなく、一人でなやんだ末、みずから命を断ってしまう。そういう例も、決して少ないとはいえないようだ。又、今の中学、高校生は、自分の相談相手になってくれるのは、「友人」というのが多い、それもやはり思い切って両親に打ち明けることができないのが原因らしい。

しかし、こんなときに思い切って父や母に相談したら、どこの世の中に自分の子供の真剣な話に、親身になって聞いてくれない親がいるだろうか、子供に対して愛情を持っている親だったら、かならず相談にのってくれるだろう。子供には、そうとわかってはいるものの、今までに経験がないので言い出せないで終ってしまうことが多いのではないだろうか。こうした結果にならないためにも、まだ小さい子供の頃から、常に親と子が気持ち良く話し合える環境をつくっておく必要があるのだと思う。

そして、その努力が達っせられた時に初めて、親子がかたく結ばれ、それによって家庭の幸福がはかられるだろう。そして、その家庭内の結びつきは一生続くのである。

今、この「家庭の日」を設けた運動が、各地で行われているが、少しでも多くの家庭が、「家庭の日」という趣旨を理解し、実行して、立派な成果の上がることを願いたいものである。

もっこす

昨年末、円の相場の上下に国民の眼が集中し、経済の先行きの視界の定らぬ中で、一喜一憂した時期が続いた。二百三十九円九銭などと、銭の単位が国際経済において生きていたことにも驚いたものである。

景気回復の足を引張る円高の打開策として、輸入の促進、内需の拡大、国内流通の改善など数多く挙げられた。すべてが即効薬になれる訳ではなく、総合的見地から経済の見直しの必要性が説かれたが、我々もっこす輩の考え等到底及び得ない至難の事であった。ただ、いまにして思えば経済の動きは、我々の日常生活そのものだから、種々と感懐なきを得ない。内需の拡大に例をとってみても、総需要抑制、景気刺激、資源有限、公共投資の増進等々ゆれ動く経済用語の渦の中で、極微細な一つの経済主体である我々には、その位置づけすら捉え得ぬ間にめまぐるしく輾転とするのみである。内需の拡大といっても、消費主体としての個人の登場の場面においては、単純に消費の拡大にあずかるとしか考え至らない。また、以前のように財物を使いまくるのかなとか、物価の高騰だけを恐れ、首をすくめる意見も聞こえる。

消費について、戦中世代なら、ちょっと良い品物を買うときなど、「ぜいたくは敵だ」という地底から響くような声を憶い起すだろう。この標語は、物資の乏しい時代に更に、厳しさを植え付けたものであった。

消費者は王様とか、使い捨てとの美徳と喧伝された高度成長期においても、この世代の人は、なにかそぐわぬ感を持っていたことと思う。

石油危機後、資源の有限性が説かれた時代にやっと落ち着きを得た人もいたことだろう。ところが不況、円高の連続のなかで、資源有限論即ち節約論だと批判する新聞投書も出てきた。内需の拡大のためには、節約の思想はマイナスに働くのであろうが、世界の態勢が不変な限り、資源の有効利用は日本にとっては、必須の要請であろう。資源を無駄使いせず、環境を汚さず、内需を拡大する方法の探索、エネルギー源の早期開発など難しい時代である。十年後、あるいは二十年後の人は、この時代をどのように評価するのであろうか。